は御年もわかく、文武の二道の御大將にて、日本におゐて、一人二人の御大名なれば、かれにつけこれにつけ、大切なる事どもに候、慮外ながら御保養おろかなるやふにぞんず、御油斷あるまじきに候といひしかば、氏郷、

かぎりあればふかねど花はちる物を心みじかき春の山風、とあり、利休涙をながし、殊勝千萬の御事かなといひて、ゑばしは物をもいはずして、さやうには候へどもといひながら、涙をおさへて、

ふるとみばつもらぬさきにはらへかし雪にはおれぬ青柳の枝、といひて、後物語一つ二つしてたち歸りけり、

〔大猷院殿御實紀三十一〕寛永十三年五月二十一日、仙臺中納言政宗卿のもとによぎらせらる、これ黄門兼日大病によてなり、政宗卿も世にありがたく、かたじけなきことゝかしこみ、身のくるしさをもわすれ、肩衣袴を著し右の手を、土井大炊頭利勝、左の手を、柳生但馬守宗矩にひかれ、酒井讃岐守忠勝は、後ろより腰を抱きて、御前にまいりければ、側近く立よらせ給ひて、中納言よ、病氣聞しよりは、一段よくて滿足せり、只今は、養生第一の時分ぞ、努々、油斷すべからずと仰あり、さて家司等めせ、小十はなきかとの御諚により、片倉小十郎、石母田大膳、中島監物、佐々若狭はるかの次よりすゝみ出て、拜し奉れば、黄門の病、今こそ肝要なれ、汝等看侍怠るべからずとの玉音をたまはり、各拜謝して退く、その後は、政宗卿にむかはせ給ひ、しばし御密旨あり、政宗卿もくるしげなる息の下にて、何ごとをか聞え上しかど、外に聞傳ふるものなし、さて返々自愛怠るまじ、頓て快復すべければ、その時は、城にまねき、目出度一ふくまいらせなん、何にもせよ用あらば、遠慮なく承はるべしと仰ありて、其座をたゝせ給ひ、はるか緣をへだて給ひて、越前々々とめしければ、越前守忠宗御前にかしこまる、時に中納言の病體聞しよりも、見て肝を消したり、中納言には